

津軽じょんがら節

——映画文学人生論

監督：斎藤耕一 (1973) 脚本：中島丈博 斎藤耕一
出演：中里イサ子 江波杏子 撮影：坂本典隆
岩城徹男 織田あきら 音楽：白川軍八郎
杉本ユキ 中川美穂子 高橋竹山
参考：津軽じょんがら節 津軽世去れ節
津軽十三蜷唄 長部日出雄(1972)「津軽書房」

アー今宵おいでの皆様方よ さあさこれから
らじょんがら節を 歌いまするよ

一九七三年度のキネマ旬報ベストワン映画『津
軽じょんがら節』（斎藤耕一監督）は原作が長部
日出雄だと私は思いこんでいた。一九七三年上半
期の直木賞受賞作が藤沢周平「暗殺の年輪」と長
部日出雄の『津軽じょんがら節』及び『津軽世去
れ節』だから、そう思うのも無理はない。

アー今宵おいでの皆様方よ さあさこれから
じょんがら節を 歌いまするよ お聞きなされ

ところが、DVDを観ると、長部日出雄は原作
者としてクレジットされていない。それに、小説
は『津軽じょんがら節』であるのに対して、映画
は『津軽じょんがら節』だ。濁点の有無や、作者
が原作使用料を貰っているのかいないのかはどう
でもよいことかもしれないが、少し気になる。

津軽の荒れ果てた漁村に、水商売の女がヤクザ
風の若い男と帰って来て、海辺の小屋で暮らしは
じめた。女は飲み屋で働き、男は花札賭博であそ
ぶ。要するにヒモなのだが、そんなヤクザな男に
盲目の少女がひかれる。少女は死者と生者との交
感の仲介をするイタコに弟子入りすることになっ
ていたが、瞽女（ゴゼ）として津軽三味線を弾く
旅芸人になりたいという夢もあった。はたして少
女の運命や如何に？ というのが映画のお話。



津軽じょんがら節

映画文学人生論

長部日出雄の小説『津軽じょんがら節』と『津軽世去れ節』にはヤクザも少女も登場しない。ところが、同じ短編集の中の『津軽十三蜆唄』には水商売風の女が登場する。彼女は荒涼とした砂浜のバス停で降り、ハイヒールを脱いで、波に洗われていた突堤のほうに渡りかける。

この女は映画で新宿のバーで働いていたという江波杏子が演じる水商売の女と重なってくる。しかし、小説の作者が描いている津軽三味線の名人たち——木田林松栄、高橋竹山、高山茂平、嘉瀬の桃などは映画には登場しない。

この地方の代表的なうたを、いまのようなかたちには仕立て上げたのは嘉瀬の桃だという。彼は美声家だったが、性格に弱いところがあり、地方巡業をつづけているうちに、酒と賭博におぼれ、昭和六年、楽屋裏で四十六歳の生涯を閉じた。

津軽には、葛西善蔵、太宰治、という所謂「破壊型」の系譜がある。桃よ、あなたもか、と長部日出雄は思い、自分もハメツ型なのではあるまいかという一種の強迫観念にとらわれた。そんな破壊型の系譜があるなどという伝説は、何とかして打ち壊さなければならぬと考えたという。

要するに、小説と映画は別物のようだが、津軽三味線と波の音、それに破壊への強迫観念は両者に共通しているのかもしれない。

波の音娘踊れば稲穂も踊る